様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ６ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０３６６

研究課題名（和文）『パンセ』と『キリスト教護教論』―パスカルの著作の意味と価値

研究課題名（英文）The Pensees and the apologetics - Meaning and values of Pascal's works

研究代表者
塩川　徹也（Shiokawa, Tetsuya）

東京大学・人文社会系研究科・名誉教授

研究者番号：００１０９０５０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円、（間接経費）　　1,110,000円

研究成果の概要（和文）：　研究代表者がこれまで発表してきた論文のうち主要なもの17編を選んで、「権威――信仰と理性の狭間」というテーマにそって配列したフランス語の論文集をパリのシャンピオン書店から公刊した。また、パスカル没後350年を記念してパリで開催された二つの国際研究集会に参加し、「『パンセ』における愛と正義」と題する特別講演と「パスカルの護教論における原罪――その意味と役割」をテーマとする研究発表を行った。
　『パンセ』の稿本、写本及び刊本についての研究を踏まえて、同書の翻訳において依拠すべき底本を決定し、それに基づいて、これまでに完成した訳稿の全面的な改訂作業に取り組んだ。

研究成果の概要（英文）：　Published a collection of studies entitled "The authority between faith and reason" at the publisher H. Champion of Paris, by gathering 17 main titles among the works the scientist had written until now. Given a invited lecture entitled "Love and justice in the Pensees" and a paper on the theme of "the original sin in the Pascal's apologetics" in two international colloquiums to commemorate the 350th anniversary of the death of Pascal.
　Fixed his choice of the original text to be used for translating the Pensees on the basis of bibliographical research in the manuscripts, copies and editions of the book, and started the complete revision of the manuscripts of the translation.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）

キーワード：パスカル　『パンセ』　キリスト教護教論　人間学　編纂史　受容史　国際研究者交流（フランス）

１．研究開始当初の背景

パスカル(1623-1662)の『パンセ』(1670)は近世フランスの生み出した文学・思想・宗教の古典として、本国フランスのみならず、欧米諸国そして明治以降の日本においても多くの読者を獲得し、高度な研究の対象となってきた。しかしそれは、作者の書き残したメモ類を死後になって関係者が編纂した書物であり、その後も現在に至るまで数々の新版の試みがなされ続けている特異なテクストである。したがって『パンセ』の研究においては、文献学的アプローチと思想・文学的アプローチが不可分である。しかしサント＝ブーヴ、レオン・ブランシュヴィック、アンリ・グイエ、ジャン・メナールのような偉大な例外はあるものの、両者の総合は容易なことではない。とりわけメナール教授が半世紀近く前から刊行を始めた『パスカル全集』は彼のテクストについての知見を一新しつつあるが、『パンセ』の巻は未刊であり、そのため個別研究は盛んであるにもかかわらず、総合的視点に立った『パンセ』研究は隘路にある。また『パンセ』は、書物としての成立の経緯からして、それがいかなるジャンルに属し、いかなる目的あるいは用途を有しているかを一意的に定めることができない。それは、あるいはキリスト教護教論として、あるいは信仰書、あるいはモラリスト文学、さらには心情の告白の書として読まれてきたが、それぞれの読み方によって、読者がそこに見出す意味と価値は異なる。『パンセ』が古典であるとすれば、その意味と価値はどこにあるのか？これは、『パンセ』研究にとって本源的ではあるが、正面切って答えることがきわめて困難な問いである。

研究代表者は、日本では前田陽一教授、フランスではジャン・メナール教授に師事して、若手研究者の頃からパスカルとポール・ロワイヤルの研究に従事し、多数の業績をあげてきた。しかしそれらは主として個別の論点に関わるモノグラフであり、また研究の姿勢として、「裁くのではなく理解すること」を目標に掲げ、研究対象の価値と研究自体の価値を問うことはできる限り抑制してきた。しかし近年、そのような態度に固執することが、研究を文化と社会から切り離し、自閉的な状況に陥れる危険をはらんでいることを鋭く自覚するに至り、より総合的でかつ社会に開かれた研究のあり方を模索していた。幸いにして 10 年ほど前から『パンセ』の全訳に取り組む機会を与えられ、テクストの全体を総合的に捉える必要性を痛感し、またその可能性を予感することができた。また 2009 年２月には、定年を迎えるにあたって最終講義を行ったが、その準備の過程で「意味と価値」が避けて通れない問題であることを再確認するとともに、それを独りよがりにならずに考えるためには、３世紀半に及ぶ『パンセ』の編纂と受容の歴史の中で、それがどのような書物として編集され、読まれ評価されてきたかを跡づけることが不可欠であることを痛感した。さらに古典の価値と古典を読むことの意味については、近著『発見術としての学問』（岩波書店、2010）において思索を深め、今や本研究に取り組む時機は熟したといえる。以上が研究開始当初の背景である。

２．研究の目的

パスカルの『パンセ』は近世フランスの生み出した古典として、欧米のみならず日本においても多数の読者を獲得し、高度な研究の対象となってきた。しかしそれは、作者の残したメモ類を死後になって関係者が編纂した書物であり、その後も現在に至るまで数々の新版の試みがなされ続けている特異なテクストである。本研究は、そのような成立の経緯を踏まえて、『パンセ』の編纂史と受容史、及び両者の相関関係を跡づけることを通じて、その根底に潜んでいる価値観とその変遷を明らかにすることを目指す。つまり『パンセ』の意味と価値が、宗教・思想・文学のいかなる局面にかかわると考えられてきたかを洗い出すことによって、この世界の名著が２１世紀の人間、とりわけ日本人にとっていかなる意味と価値を持ち得るかを探究する。

３．研究の方法

（1）文献資料の探索と入手を進めながら、パスカルの遺稿がどのようにして『パンセ』という書物として成立したかを、同時代の資料の分析を通じて探求する。

（2）３世紀半に及ぶ『パンセ』の編纂史と受容史について、いくつかのテーマを立てて研究を進め、個々の成果をまとめるとともに、それに基づいて『パンセ』の現代的意義と価値についての見通しを示す。

（3）研究組織については、研究分担者は立てないが、国内外の研究機関・研究者と緊密な協力体制を敷いて研究を実施する。そのために主としてフランスで、年１～２回半月程度、研究交流と文献資料の調査を行う。

①国内では、研究代表者が 2009 年まで在職していた東京大学大学院人文社会系研究科フランス文学研究室の協力を得て、元同僚たち、とりわけ中地義和・塚本昌則両教授に意見交換と専門知識の提供を要請する。

②国外では、研究代表者が研究員を務めるパリ・ソルボンヌ大学「17・18 世紀フランス語フランス文学研究センター」で、パスカル研究の専門家（メナール教授、セリエ教授、フェレロル教授）と意見交換を行い、専門知識の提供を受ける。

③フランス国立図書館、パリのマザリーヌ図書館等で資料調査を行う。

４．研究成果

（1）研究代表者がこれまでフランス語で発表した論文――その多くは、パスカルはいかなる護教論を構想し、そこにいかなるい意味と価値を見出していたかという問題意識に導かれている――をまとめて『権威――理性と信仰の狭間』という題名で、パリのシャンピオン書店から刊行した。これに対しては、日本（『フランス哲学・思想研究』）、イタリア(Quaderni leif)、フランス(Fabula、RHLF)の学術誌等が詳細な書評を公表し、高い評価を与えている。

（2）10 数年前から、セリエ版に依拠して取り組んでいる『パンセ』の翻訳を進め、すべての断章を訳出した。しかし『パンセ』の稿本、写本及び刊本の調査を行う過程で、セリエ版の問題点を強く意識するに至り、底本を、パスカルの没後すぐに作成された「第一写本」に変更し、「自筆原稿集」と「第二写本」、および主要な刊本を参照しながら翻訳を改定することにした。改訂作業は、研究期間の終了時点で、全体の三分の一程度まで進行している。

（3）パリの図書館（フランス国立図書館、マザリーヌ図書館）で資料調査を行い、『パンセ』の発想源についていくつかの新知見を得た。とりわけパスカルがユダヤ教の「ラビの教え」に関する知識を得るために参照したレモン・マルタンの著作『プギオ・フィデイ』についての調査の過程で、原罪に由来する人間の本性のゆがみを意味するためにパスカルが用いた"figmentum malum"という表現の典拠がこの書にあることが確認されたが、これはパスカルの人間学の基盤を考える上で貴重な示唆を与えるものである。

（4）課題に関連する個別のテーマ、とりわけ『パンセ』の編纂史と受容史に関わるいくつかの問題について研究を進め、その成果を国際研究集会等で口頭発表し、また学術誌等に論文・小論の形で公表した。その主なものは以下のとおりである。

①パスカルの人間学と神学の双方において最重要課題の一つである愛と正義の関係を論ずる招待講演を、パスカル没後 350 周年記念国際研究集会で行った。

②原罪の教義がパスカルの護教論において果たす役割に関する研究発表を、「パスカルの護教論再読」を共通テーマとする国際研究集会で行った。以上二つの発表はその後論文として公表された。

③『パンセ』の編纂の歴史を概観することを通じて、歴代の編纂者たちが、それにいかなる意味と価値を与えようとしていたかを素描した論文「パスカルの『パンセ』――中断された作品の生成論」のフランス語版を、文学作品の生成学をテーマとする論集に寄稿した。

④「〈私〉とは何か」という問いにパスカルとデカルトがどのように答えたかを詳細に検討することを通じて、両者の思想とりわけ人間学の相違とその意味を考察した論文を『デカルト哲学をめぐる論戦。小林哲学・論駁と答弁』と題する論文集に寄稿した。

⑤パスカルの護教論、とりわけその基盤をなす原罪の思想を厳しく批判した理神論者シャールを取り上げ、その主張をパスカルの思想と対比することを通じて、パスカルの護教論の意味と価値を考察するフランス語の論文「ロベール・シャールの論敵パスカル」を自伝の諸相を共通テーマとする国際研究集会の報告書の一編として公表した。

⑥「『パンセ』の一句をめぐる変奏曲」において、パスカルの護教論が「精神の倫理」に反すると述べて、パスカルを厳しく批判した詩人ポール・ヴァレリーとパスカルとの「対決＝対話」に考察を加えた小文を『ヴァレリー集成 IV』の月報に発表した。

（5）機会をとらえて本研究の成果を学生あるいは市民向けの講演会で解説するなどの啓発活動を行った。

①白百合女子大学のオムニバス講義で 2 回にわたって、『パンセ』がどのように編纂され、また受容されたかを概観することを通じて、『パンセ』の意味と価値を考察した。

②信州大学で開催された日本学士院の公開講座で、「パスカルの賭け――意思決定における理性と信」と題する講演を行い、パスカルの思想と信仰の意味と価値について啓発的な解説を行った。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　6　件）

① 塩川徹也(SHIOKAWA, Tetsuya)《 Amour et justice : de l'observation moraliste à l'exhortation spirituelle 》, *XVII*e *siècle*, nº 261, p. 637-644, 2013

② 塩川徹也(SHIOKAWA, Tetsuya)《 Le péché originel dans l'apologie pascalienne : stratégie et enjeux 》, *Chroniques de Port-Royal* nº 63, 2013, p. 243-253.

③ 塩川徹也「彼方への〈対決＝対話〉――パスカルとヴァレリー」『ヴァレリー集成 IV』筑摩書房、2011 年 11 月、「月報 4」p. 4-6

④ 塩川徹也「ロベール・シャール『東インド航海日誌』における宗教・通商・国際関係」*Les Lettres françaises* 31 号、上智大学フランス語フランス文学会、2011 年 7 月、p. 39-51.

〔学会発表〕（計　2　件）

①塩川徹也(SHIOKAWA, Tetsuya) 《 Amour et justice dans les *Pensées* de Pascal : de l'observation moraliste à l'exhortation spirituelle 》, 17 世紀学会（フランス）主催国際研究集会「ブレズ・パスカル(1623-1662)」、パリ・ソルボンヌ大学（招待講演）2012 年 10 月 27 日

②塩川徹也(SHIOKAWA, Tetsuya)《 Le péché

originel dans l'apologie pascalienne : stratégie et enjeux》、ポール・ロワイヤル友の会、パリ・ソルボンヌ大学 17・18 世紀フランス語フランス文学研究センター、フランス文芸家協会共催国際研究集会「パスカルの護教論再読」、パリ、マッサ館、2012 年 10 月 5 日

〔図書〕（計　8　件）

① 『書物の現場』（白百合女子大学言語・文学研究センター編・篠田勝英責任編集）弘学社、2013 年 11 月〔塩川徹也「「中断された作品」を書物にする――パスカル『パンセ』の場合」、p. 133-148〕

② 『デカルトをめぐる論戦』（安孫子信・出口康夫・松田克進［編］）、京都大学学術出版会、2013 年 3 月〔塩川徹也「「〈私〉とは何か」――パスカルの〈私〉とデカルトの〈私〉」p. 9-32〕

③ *Robert Challe au carrefour des continents et des cultures*, sous la direction de Geneviève Artigas-Menant, Jacques Cormier et Driss Aïssaoui, Paris, Hermann, 2013 [Hiroko et Tetsuya Shiokawa, 《 La religion, le commerce et la politique internationale dans le *Journal d'un voyage fait aux Indes orientales* 》, p. 171-182]

④ Tetsuya Shiokawa, *Entre foi et raison : l'autorité. Études pascaliennes*, Paris, H. Champion, 2012, 260 p

⑤ *Les destinataires du moi : altérités de l'autobiographie*, sous la direction de Shojiro Kuwase, Makoto Masuda et Jean-Christophe Sampieri, Dijon, Éditions Universitaires de Dijon, collection *Écritures*, 2012 [Tetsuya Shiokawa, 《 Pascal adversaire de Robert Challe dans les *Difficultés sur la Religion proposées au Père Malebranche* 》, p. 37-47]

⑥ 『フランス文化事典』（田村毅・塩川徹也・西本晃二・鈴木雅生［編］）、丸善出版、767 頁、2012 年

⑦ *Comment naît une œuvre littéraire ?* Textes réunis par K. Yoshikawa et N. Taguchi, Paris, H. Champion, 2011 [Tetsuya Shiokawa, 《 La génétique des 《 *opera interrupta* 》. Le cas de Pascal 》, p. 14-24]

６．研究組織

(1)研究代表者

塩川　徹也（SHIOKAWA, Tetsuya）
東京大学・大学院人文社会系研究科・名誉教授
研究者番号：００１０９０５０